

総説

説経節「さんせう太夫」と丹後国分寺

前岡 孝彰¹⁾

Tango Kokubunji that appears in Sekkyo-bushi “Sansho Dayu”

Takaaki MAEOKA¹⁾

Abstract

In "Sansho Dayu (Sansho the Bailiff)" being a Sekkyo-Bushi (sutra-based ballads) established in the early modern period, Tango Kokubunji (provincial monastery in Tango province) is one of the important scenes. In this paper, the points of argument were organized based on archaeological knowledge which had not been employed in the study of "Sansho Dayu". While there are three Kokubunji sites in Tango, archaeological survey results and others have revealed that they used to be placed in Fuchu (Kokubun, Miyazu City) from their construction in Nara period. Thus, Kokubunji being a scene of "Sansho Dayu" can be understood as Tango Kokubunji in Fuchu. The reason behind the adoption of Kokubunji in Wae (Wae, Maizuru City) in this narrative story is likely to be related to temple solicitation associated with the reconstruction of Tango Kokubunji in Kamakura period, but there still remain many issues to be resolved. If new materials regarding Tango Kokubunji increase due to the progress of excavations and likes, the establishing process and others of "Sansho Dayu" could be clarified.

Key words : Tango province, "Sansho Dayu", Kokubunji

(2020年12月6日受付, 2021年3月5日受理, 2021年3月31日発行)

1. はじめに

1.1 本稿の目的

京都府舞鶴市を流れる由良川下流域には、山椒太夫にまつわる民話が多く残されている。山椒太夫は、安寿と厨子王という登場人物とともに、森鷗外の代表作の一つ『山椒大夫』^{注1)}として広く知られるようになった。

1) 兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科 博士後期課程

1) Graduate School of Regional Resource Management, University of Hyogo, Doctoral course

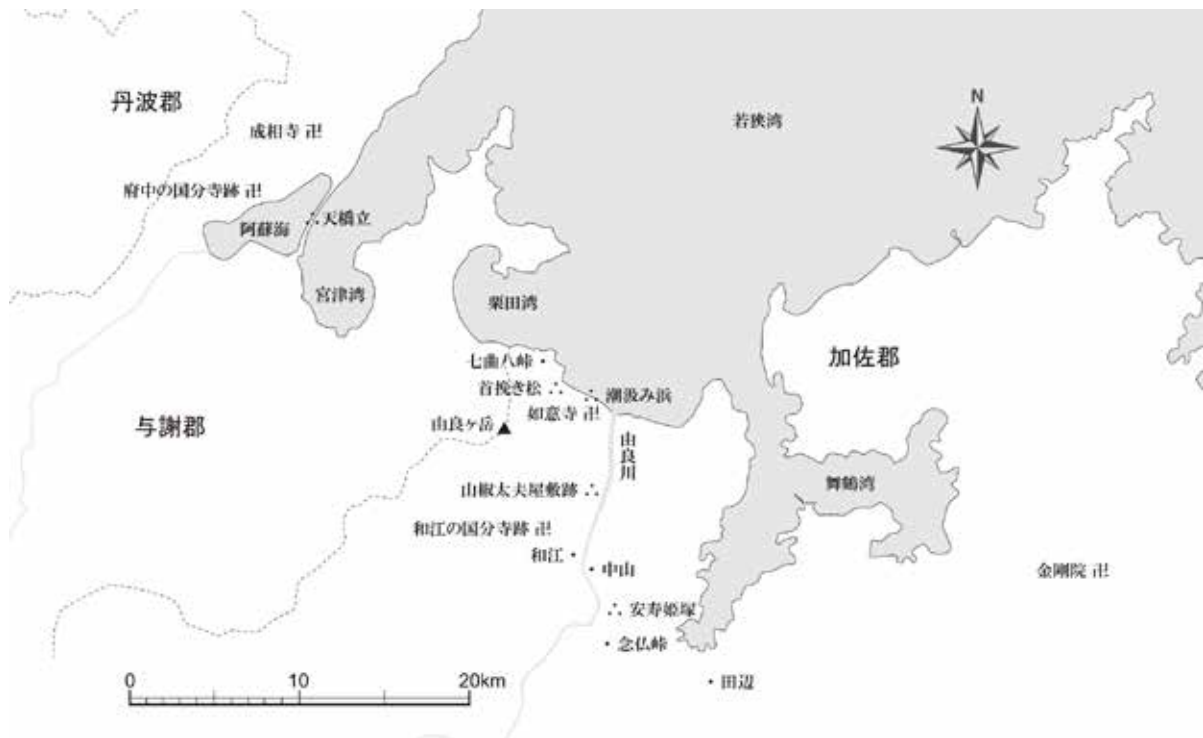


図1 丹後における「さんせう太夫」関連地図（郡名と郡境は近世以前のもの、室木1977を参考に筆者作成）

森鷗外の『山椒大夫』は、中世末までに成立した説経節「さんせう太夫」を基に、拷問や処刑など残虐な場面を和らげ、親子の恩愛を強調してまとめた小説である。「さんせう太夫」やその民話は、丹後の「国分寺」が重要な舞台となっている。国分寺は、天平13年（741）に、聖武天皇の勅願によって国ごとに建立された官寺である。なぜ、国分寺が舞台となっているのか、その意味や役割については、国文学や民俗学、中世史など多方面から研究があるものの、丹後国分寺を正面から扱った研究はなく明確な結論には達していない。そもそも、奈良時代の丹後国分寺の所在地は発見されていないなど、未解明な部分が多い。本稿では、「さんせう太夫」に登場する国分寺について、考古学的手法を取り入れながら、その所在地や物語中での役割を明らかにしていきたい。

1.2 説経節「さんせう太夫」

説経節とは、中世に興り近世前半に盛行した語り物で、仏教の説経から発し、平曲の影響を受けて成立した民衆芸能である。「さんせう太夫」は、その冒頭に「ただ今語り申す御物語、国を申さば丹後の国、金焼地蔵^{注2)}の御本地を、あらあら説きたて広め申すに、これも一度は人間にておはします。」とあるとおり、仏が人間であった時の物語、すなわち人間としての本地（本源）を説く本地譚として語り始める物語である。金焼地蔵は、陸奥国の掾であった岩城の判官正氏としてこの世に現れ、その後、正氏にかかわる物語が展開する。

「さんせう太夫」が、いつ、誰によって作られたのかは明らかではない。それは、説経節がもともと口承文芸であり、それを語る説経師によって日常的に削除や追加がおこなわれたと推定されるからである。現存する最古のテキストである説経与七郎正本『さんせう太夫』が成立したのは、寛永年間（1624～1644）であり、語り物としての「さんせう太夫」は、少なくとも中

世末までには成立していたと考えられている。

1.3 「さんせう太夫」の物語

今後の検討に必要であるため、冗長になるものの、「さんせう太夫」の粗筋をまとめておく。

奥州五十四郡の主であった正氏は、讒言によって筑紫国安楽寺（福岡県太宰府市）へ流された。妻と安寿とつし王（厨子王）の姉弟、そして乳母は、夫・父恋しさに、また元の領地を安堵してもらうため、京へ旅立つ。4人は、越後国直井の浦（新潟県上越市）で人買いに騙され、母と乳母は蝦夷に、姉弟は丹後国由良（宮津市由良）の山椒太夫のもとへ売られる。そこで、安寿は潮汲み、つし王は柴刈りに酷使され、辛酸をなめる。安寿は、初山入りの日につし王に逃亡を勧めるが、山椒太夫の三男である三郎に立ち聞きされ、罰として2人とも額に焼き金をあてられる。その後、2人揃って柴刈りに行ったある日、安寿はつし王を山から逃がし、自分は山椒太夫の厳しい拷問にあって惨死する。山椒太夫らはつし王が逃げ込んだ丹後国分寺に乗り込むが、国分寺の僧は日本国中の神々を勧請して大誓文を立て、つし王はここにはいないと撥ねつける。なおも執拗な詮索に逢うものの、金焼地蔵の靈験によって太夫一味は退散し、つし王は守られる。つし王は一切を僧に打ち明け、その背に負われて京へと出る。つし王は、京の朱雀権現堂で僧と別れるが、道中で狭い籠に入っていたために足腰が立たなくなり乞食となる。支援の手から外れたつし王は、土を運ぶ車に引かれて大坂の天王寺へと送られる。天王寺の石の鳥居にすぎると、聖徳太子の計らいか足腰が立つようになり、やがて天王寺の阿闍梨に拾われ、茶汲み童子として暮らすようになる。ある時、都の貴族である梅津院が養子を求めて天王寺に現れ、百人の稚児が居並ぶ席に臨む。そこで、末席に座るつし王を見出し、満場の失笑を買いながらもその身体を清めると、輝くばかりの稚児に変わる。梅津院の養子となったつし王は、やがて天皇と対面し、系図の巻物などを証拠として奥州五十四郡の主に戻り咲く。しかし、つし王は、奥州よりも丹後国守を望み、すぐに丹後国へと入部する。国分寺の僧と再会し、そこで安寿が拷問を受けて死んだことを知り、復讐の思いを強めたつし王は、国分寺に山椒太夫一門を呼び寄せ、極刑をもって報いる。また、母の行方を尋ねて蝦夷に赴き、そこで盲目となった母と対面する。つし王が金焼地蔵を母の両眼に当てると、その眼は完治する。多くの利益を与えた金焼地蔵は、安寿の菩提のために丹後国に祀られ、今も多くの信仰を集めている。

次節以降、この「さんせう太夫」に描かれた国分寺について、その所在地や役割を具体的に検討する。なお、口承文芸から史実を追究するのは容易ではない。そこで、まず「さんせう太夫」に国分寺がどのように描かれているのかを確認し、その後丹後国分寺の遺称地を考古学的に検証していきたい。

2. 「さんせう太夫」に描かれた国分寺

2.1 「さんせう太夫」における国分寺

「さんせう太夫」のうち、国分寺が描かれた場面には、逃走したつし王が匿われた場面と、丹後国守となった後に訪れた場面とがある。いずれも本論の中心となるため、詳述する。

「由良の港のさんせう太夫」の屋敷から逃走したつし王は、「あるく峠に腰を掛け」と追手を目にする。つし王は、出会った村人に「この先に在所はなきか」と問うと「渡の在所」と、「寺はないか」と問うと「国分寺」という答えが返ってくる。国分寺の本尊は、「毘沙門」という。「あら有難の御事や。某が膚に掛けたるも、神体は毘沙門也。力を添えて給はれ」と、つし王は

国分寺を目指す。国分寺では、僧一人が日中の勤行をしていた。つし王の申し出を聞いた僧は、皮籠の中につし王を隠す。国分寺へやって来た山椒太夫らは、「寺中を捜させん」と言って「内陣・長押・庫裏・眼蔵・仏壇・縁の下・築地の下、天井の裏板はづいて」捜したものの、見つからない。そこで、三郎は「身にも及ばぬ大誓文をお立てあらば、由良の港へもどらう」と言う。僧は、全国の「神数九万八千七社の御神、仏の数が一万三千仏」に、つし王のことは知らないと言っている。しかし、三郎は、垂木に吊るされた皮籠が揺らいでいることに気付く。「わつばある」と蓋を開けると、つし王が抱いていた金焼地蔵が光を放ったため、三郎は縁から下へ転げ落ちる。それを見た山椒太夫の一行は、恐れをなして邸へと戻っていく。

丹後国守となったつし王は、まず僧に会うために国分寺を訪れる。新しい国守がつし王であることを知らない僧は、「このやうなる古びたるお寺」に国守が来ることを不審に思うが、つし王と再会して話を聞き、大いに喜ぶ。つし王はそこで姉の非業の死を知り、山椒太夫らを国分寺に呼び寄せた。つし王は、山椒太夫を「国分寺の広庭」に首から下を埋めさせ、竹鋸を「子供にひかせ、憂き目を見せよ」と命じた。その後、つし王は太郎と次郎に丹後八百八町を半分ずつ分け与えた。太郎は、「髪を剃り落し、国分寺にすわりつつ、姉御の菩提を弔ひ、又、太夫の跡」をとった。一方慈悲第一の次郎は、丹後国の地頭、一色氏の祖となった。

2.2 「さんせう太夫」における国分寺の検討

「さんせう太夫」の国分寺は、「幼い者のことなれば、よも遠くへは落ちまいぞ」という山椒太夫の言葉や、つし王が逃走したその日の日中に到着していることから、山椒太夫の屋敷があった由良の港（由良川河口）からさほど遠くない場所に位置していたと考えられる。また、「渡の在所」と「あるく峠」にも近かった。「渡の在所」は、元禄2年（1689）に貝原益軒が著した『己巳紀行』において、由良川の渡船場として知られた舞鶴市中山に「渡りの里と云名有所也」と記されている（板坂1991）。「あるく峠」は不詳であるが、さんせう太夫の屋敷跡などの遺称地の位置関係から、由良ヶ岳（標高585m）の東南側にある峠とする説がある（室木1977）。さらに、「古びたるお寺」には、「楼門」や「庫裏」、「眼蔵」（寝室）、「築地」、「広庭」などがあり、「尊き僧一人まし」ていることから、「さんせう太夫」の国分寺は、由良川下流域にあり、僧1人で維持できる程度の小規模な庵寺であったと言える。その国分寺には毘沙門が本尊として祀られており、僧は逃走者であるつし王を命を懸けて守った人情と義理に厚い人物であった。

さて、口承文芸である「さんせう太夫」は、その内容の多くは創作された説話であり、そこから事実を求めるのは困難である。そこで、丹後が舞台となっている場面において、具体的事実性を示す固有名詞は、「由良」「ありく峠」、そして「国分寺」の3例のみである点に注目したい。つまり、国分寺は、聞き手を信用させるために必要な場所であり、「さんせう太夫」の構成要素としてきわめて重要であると考えられよう。丹後には、「国分寺跡」とされる場所が3か所知られている。「さんせう太夫」のなかの国分寺を検討する上で、次節においてそれぞれの位置や環境を検討し、古代・中世の丹後国分寺の所在地を確定させておく。

3. 3か所の丹後国分寺遺称地

3.1 和江の国分寺遺称地

由良川の河口から約4km遡った左岸部に、舞鶴市和江の集落がある（写真1）。和江は、由良川に流れ込む和江谷川が形成した小扇状地状の地形に、50軒ほどの住宅が建つ小集落であり、由



写真1 和江集落遠景（東から）



写真2 仏国山国分寺跡（北から）

良川に面する可住地から約1km北西へ山道を登った狭い谷地に、「仏国山国分寺跡」がある（写真2）。仏国山国分寺は、天曆10年（956）に焼失したという伝承があり（京都府教育会加佐郡分会1925）、現在は毘沙門堂が建てられている。しかし、狭小な谷地しかないこの地が、聖武天皇の国分寺建立詔にみる「好处」とは到底考えられず、七堂伽藍を備えた古代の丹後国分寺が存在したとみなすのは困難である。

なお、昭和27年（1952）に京都大学の梅原末治が調査に訪れたものの、結論は出なかったらしい（谷口1977）。また、「小字本堂付近から、古代の布目瓦、屋敷礫石及土器等が発見される」（和江区1972）という。この布目瓦は、昭和40年（1965）頃に国分寺遺称地の地下から発見されたもので、茶褐色を帯びた平瓦の小片1点である^{注3}。この瓦を調査した杉原和雄は、「布目の荒さからみて平安中期頃かと推定される」との見解を示している（吉田1972）。

布目瓦からは、奈良・平安時代の瓦葺建物の存在を想定できよう。しかし、小片1点のみであることと併せ、古代の国分寺の立地として適さないことには変わりはない。周辺に平坦地のない立地から、多数の坊を有する山林寺院も想定できない。瓦片は、古代に瓦葺きの小堂が建てられていた可能性を示すものの、国分寺の存在を証する資料にはなり得ない。

3.2 中山の国分寺遺称地

前述の『己巳紀行』には、「渡りの里」のほか、国分寺についての記述もみられる（板坂1991）。「翌廿九日。早旦に宮津を出、（中略）七曲八嶺とて甚嶮難の坂路五十町を経て、由良の港に至る。（中略）由良は宮津より二里三十町有。古へ千軒の在所也しと云。今も民家三百余有とぞ。石浦由良の内也。本村より半里。と云所に、山椒大夫がやしきの跡とて、石の水船あり。

中山渡りの里と云名有所也。大河有。船にて渡る。此外に丹後国分寺の跡有。今、小堂に弥勒の像のみ残れり。」

中山（舞鶴市中山）は、和江とは由良川を挟んで対面する位置関係にあり、江戸時代には、丹後各地から田辺（舞鶴市街地）を経て京へ至る街道の宿場町として栄えていた集落である。現在、中山には国分寺を称する寺院はなく、また関連する地名や伝承、考古資料も残されていない。さらに、『丹哥府志』（天保12年刊）、『加佐郡誌』（大正14年刊）などの地誌にも、中山に国分寺があったという記述はない^{注4}。中山の平坦地は、由良川の氾濫時に水没するため、古代の国分寺が建立される地理的環境にはない。

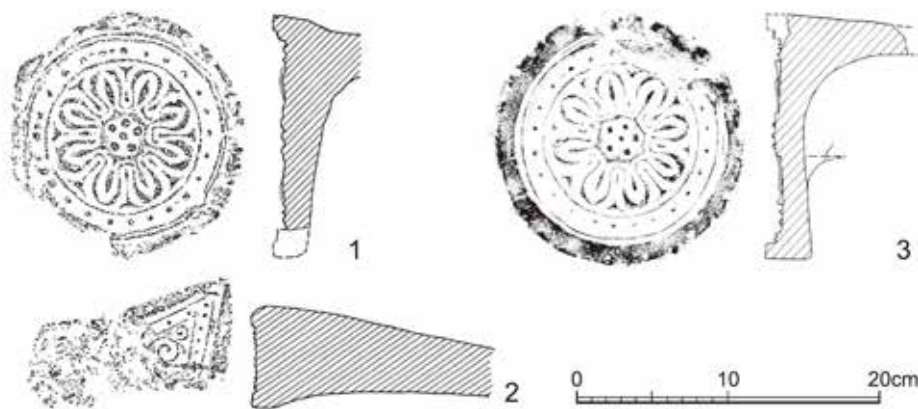
由良川を挟んだ2つの集落に、国分寺遺称地があるのは不自然である。これは、①貝原が中山

と和江を混同していたか、②後に中山と和江の境界が変わったか、あるいは③中山の国分寺伝承が途絶えたかなどの可能性が考えられる。①については、貝原は、由良（宮津市由良）から石浦（宮津市石浦）を経て中山に至っている。実際には、石浦と中山との間に和江の集落があるものの、『己巳紀行』にはその記述はない。そのため、貝原が中山と和江を混同していた可能性はあるが、中山へは「船にて渡る。」と記しており、中山が由良や石浦の対岸にあると認識していたことは明らかである。「大河」を挟んだ両岸の集落を混同したとは想定しにくい。②については、由良川は、寛永2年（1625）～慶応4年（1868）の243年間に106回の水害の記録が残されている（国土交通省福知山河川国道事務所2004）。大洪水による由良川の流路変更により、村の境界が変わった可能性は想定できる。③については、元禄2年（1689）に貝原益軒が中山を訪れてから、天保12年（1841）に『丹哥府志』が刊行されるまでの約150年間に、国分寺伝承が忘れ去られたとは考えにくい。特に、説経節「さんせう太夫」の舞台となった土地であれば、伝承はより残りやすいと考えられるため、③の可能性は低い。明確な根拠に乏しいが、②がもっとも想定しやすく、中山と和江の国分寺遺称地は同一であったと考えておく。

3.3 府中の国分寺跡（史跡丹後国分寺跡）

史跡丹後国分寺跡は、与謝郡内にある宮津市国分にあり、阿蘇海や天橋立を臨む小高い扇状地上に位置している。金堂跡や塔跡の基壇および礎石などが現存しており、これらの配置が『丹後国分寺再興縁起』（以下、『縁起』と記す）にある金堂指図と一致することなどから、昭和5年（1930）に国史跡に指定された。『縁起』によると、これらは嘉暦元年（1326）から建武元年（1334）にかけて、律宗西大寺派の宣基上人によって再興されたものであり、この時完成した伽藍は、文亀元年（1501）頃に描かれた雪舟筆「天橋立図」の画中にも反映されている（吹田2010）ため、中世の丹後国分寺は府中に置かれていたことは疑いない。

『縁起』には、「伽藍荒廢して狐狼の窟となり、仏閣乱墜して雉菟のすみかとなる」と、再興以前の荒廢した国分寺の様子が各所に記されている（中嶋1982、石川1984）。そこには移転に関する記述はないため、再興前の国分寺もすでに現在地にあった可能性が高い。ただし、それが創建期にまで遡るかは不明であり、史跡丹後国分寺跡の発掘調査でも、創建期の遺構はまったく確認されていない。では、遺物からはどのような可能性が考えられるのだろうか。



1・2…丹後国分寺跡採集、3…普賢寺跡出土

図2 丹後国分寺関連軒瓦拓影 S=1:5

1・2 中嶋1982（実測図は筆者が再トレース）、3 星野2000

古代寺院の年代を知る上でもっとも重要な資料は、軒瓦である。史跡丹後国分寺跡からは、これまでに軒丸瓦、軒平瓦各1点が見つまっている。軒丸瓦は、明治42年（1909）に金堂跡の北側から採集された単弁八弁蓮華文軒丸瓦（図2-1）である。蓮弁は、太く立体的な突線で表す重弁で、外側の突線は弁の外形を、内側の突線は子葉を表現する点で特徴的である。本軒丸瓦は、山背国の普賢寺跡（京田辺市普賢寺）出土のもの（図2-3）と同範であることが判明している（京都府立丹後郷土資料館1980）。京阪奈丘陵の谷筋の一角に位置する普賢寺は、7世紀後半に創建され、奈良時代から平安時代にかけて安定的に継続した古代寺院である。発掘調査では、山背国分寺の補足瓦と同範の軒丸瓦などとともに、この軒丸瓦が多く出土している。その時期は、恭仁宮大極殿が山背国分寺に施入される天平18年（746）以降、8世紀末までの間に位置づけられている（中島ほか1989、上原2006）。軒平瓦には、唐草文軒平瓦が1点ある（図2-2）。欠損部が多く詳細は不明であるが、顎の形状は直線顎であることから、奈良時代のものと判断できる。単弁八弁蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦は、ともに奈良時代のものであり、現状ではこれらを丹後国分寺の創建瓦と考えて大過ない（菱田2007）。

3.4 丹後国分寺の所在地

丹後国分寺は、平坦地が狭小で考古学的な裏付けもない和江と中山に置かれていた可能性は否定でき、創建時から中世に至るまで、一貫して府中にあったと考えられる。ただし、採集された瓦2点のみで、丹後国分寺が創建期から府中にあったと結論づけるのは乱暴であるため、国分寺と関連の深い国府と国分尼寺の所在地について触れておく。

奈良時代の丹後国府の所在地は詳らかではないが、天平9年（737）に「丹後国与射郡（与謝郡）」の大領が遞送使として遣われていること（『但馬国正税帳』）や、駅家・駅路との関係から与謝郡内に置かれていたことは疑いない^{注5)}。丹後国分尼寺は、宝亀4年（773）のものと考えられる太政官符に「国分二寺料稻四万束」（『大日本古文書』21巻p.282）とあることから、丹後国分寺（僧寺）とともに建立されていたことは確実である。その遺構は確認されていないものの、僧寺の東約700mにある中野遺跡が尼寺ないしは国府の一部とされている（中嶋1982）。中野遺跡からは、平城宮6225C型式を忠実に模した複弁八弁蓮華文軒丸瓦と、平城宮6663C型式を模した均整唐草文軒平瓦が出土している。6225・6663型式の組合せは、平城宮第二次大極殿・朝堂院において主体的に用いられた軒瓦であり、その時期は平城京Ⅲ期、すなわち天平17年（745）～天平宝字元年（757）を中心とする。また、中野遺跡では「西寺」銘の墨書土器が出土している。中野遺跡は僧寺の東に位置しており、「西寺」では矛盾が生じる。そのため菱田哲郎は、中野遺跡を「与謝郡の郡家を含み、それに隣接して定額寺があるという構造」と想定し、「中野廃寺」と仮称した（菱田2007）。ただ、丹後における古代寺院の分布や密度をみると、「西寺」とその対になる寺院は、国分二寺以外は想定し難く、中野遺跡が尼寺であった可能性は高いと考える。あくまでも傍証にすぎないが、国府・国分尼寺ともに与謝郡内にあり、特に国分尼寺は僧寺に近接することから、奈良時代の丹後国分寺は府中に置かれていたとみなして良いだろう。

府中におかれていた丹後国分寺は、なぜ「さんせう太夫」において、由良近傍の寺院として描かれたのだろうか。また、その目的は何だったのだろうか。今一度、「さんせう太夫」の成立を振り返った後、いくつかの可能性を検討したい。

4. 「さんせう太夫」の成立と国分寺

4.1 「さんせう太夫」の成立

現在知られている「さんせう太夫」の最も古いテキストは、「天下一説経与七郎正本」でその成立は寛永年間（1624～1644）である（酒向1992）。先学の研究によると、「さんせう太夫」は、青森県津軽地方のイタコに伝わる祭文が起源となっており（柳田1915）、丹後・佐渡など日本海沿岸を歩く巫女たちが脚色・改作して成立したとされる（室木1977、安野1987）。

「さんせう太夫」の起源となったイタコ祭文は、岩木山（青森県弘前市）の祭神としての安寿が、苦難の末の転生を語る一種の本地譚である。活字化されたイタコ祭文には、「お岩木様一代記」と「岩木山一代記」がある（宮田1985）。2つの祭文は、口承者の違いから多くの差異がみられるが、つし王が逃げ込んだ丹後国の寺は、「丹後の国のあなお寺（亀岡市の穴太寺か）」や「小さな山寺」とあり、その寺の住持は「ここは、清水寺と言う寺である」と言っているとおり、国分寺の名は出てこない。つまり、当初あった巫女の語り物に国分寺の記述があったとは考えられず、丹後に伝わっていた伝承にその名があったか、あるいは説経節としてまとめられた際に書き足されたと考えるのが穏当であろう。

4.2 聖武天皇勅願寺としての国分寺

説経は、本来社寺の勧進のためその利益を説き、人々に崇敬の念を呼びおこすためのものである。また、つし王を匿った「命の親のお聖」の世評を高めるため、「さんせう太夫」では、あえて勅願の寺院である国分寺の名を冠した可能性がある。ちなみに、森鷗外は「当山は勅願の寺院で、三門には勅額をかけ、七重の塔には宸翰金字の経文が蔵めてある」と僧に語らせており、寺の権威を高める演出を施している。しかし、この説は明瞭に否定できる。

中世、高野山や比叡山、東大寺などの社寺は、単に信仰の場だけではなく、天皇を超える権威を仏神に認めていたため、世俗の権力の及ばない治外法権的な「聖域」を有していた。境内は、犯罪者を含め民衆の避難所（アジュール）としての性格をもっていたほか、時には国家権力とも対峙する存在であった。「さんせう太夫」のなかの国分寺にも、避難所としての面影が見受けられる。「渡の在所」ではなく国分寺に逃げ込むつし王には、そこが寺＝避難所であるという直感的な思考が反映されている。また、僧の側に立てば、大誓文の威力（呪術的な験力）によって山椒太夫の武力的な干渉を排除し、つし王を守り抜こうとする気概が感じられ、国分寺＝避難所であるとする意識がはたらいていた（岩崎1973）。しかし、この国分寺には、聖武天皇勅願の大伽藍を彷彿とさせる要素はなく、「僧一人まし」ている「古びたるお寺」と、むしろ破れ寺を思わせる情景が描かれている。避難所であると同時に聖域でもあった高野山などとは異なり、国分寺には避難所としての性格以上のものをもっていなかったことがわかる。

4.3 再興国分寺と勧進

松尾剛次は、「さんせう太夫」が乾元元年（1302）以降に成立したことを明らかにした上で、鎌倉・極楽寺から来た律宗西大寺派の宣基により丹後国分寺再興勧進のために作成された話であるか、少なくともその話が基になっているという仮説を提示した（松尾1994）。中世において、説経をはじめ、能や狂言といった芸能は、勧進という仏教的な行為と深く結びついており（網野1984）、この仮説は魅力的である。

松尾は、「さんせう太夫」の舞台である丹後国分寺は、建武元年（1334）以前の、宣基による

再興が始まったばかりの時期の国分寺と考えた。そして、「さんせう太夫」は、丹後国分寺の再興勧進のために語られた国分寺の話、例えば「丹後国分寺に下人が逃げ込み、地蔵の靈験と住持が匿ってくれたことによって救われた」というような話が基になっていると推定した。また、「さんせう太夫」における丹後国分寺が府中ではなく、由良近傍にあることについては、「さんせう太夫」が流行し、山椒太夫が由良にいたことから、由良の近くにあった古寺跡を丹後国分寺跡としたと想定した。さらに、岩城氏の貴種流離譚や、山椒太夫の長者没落譚、金焼地蔵の靈験譚、つし王の御家再興譚など、複数の要素によって構成されている「さんせう太夫」のうち、靈験譚と御家再興譚については、丹後国分寺の再興勧進に関連して作成されたと考えたのである。

4.4 松尾説の課題

多くの示唆に富む松尾の研究であるが、検討すべき問題点が3点ある。

1点目は、国分寺の本尊についてである。「さんせう太夫」の国分寺の本尊は、毘沙門天である。また、つし王が肌身離さず持っていた金焼地蔵も、その神体は毘沙門天であった。毘沙門天は仏法を守護する四天王の神将の一つであり、仏法界を犯すものがあれば、これを破滅させる強力な力を発揮されるといわれている。

聖武天皇の国分寺建立詔にみえるとおり、国分寺の本尊は「釈迦牟尼仏尊像、高一丈六尺」である。丹後国分寺では、『縁起』に再建当時まで残っていた仏像が列挙されており、それらは「金銅薬師如来像一軀、四大天王像各一軀、吉祥天女像一軀、賓頭盧尊者像一軀、梵天帝尺像少々」であった。さらに、金堂の上棟記録では、「金銅薬師如来像一軀一揲手天王御作・四天王像各一軀・吉祥天女像一軀以上当寺以往本尊」とあり、これらが国分寺の中核となる尊像として繰り返し記されている。毘沙門天を含む四天王像も祀られているものの、再建国分寺の本尊は、あくまでも薬師如来像であることは明らかである。丹後国分寺では、再興の過程で新たに付加されたと思われる仏像は見当たらず、西大寺流が加わっても、古代以来の性格を継承し、それを機能されることに中心を置いていた(追塩1996)ことから、「さんせう太夫」にみえる丹後国分寺の本尊が毘沙門天になっていることはきわめて異質である^{注6)}。さらに、『縁起』では、再興に際して「偏繫憑於本尊、廻在と處と、都不身命財、立門と戸と、偏勧進尊卑人」と記し、勧進は本尊が拠りどころとなっている。原「さんせう太夫」が再興勧進のために作成された話ならば、本尊が異なることは理解し難い。

2点目は、靈験譚である。「さんせう太夫」の靈験譚を構成するもっとも重要な要素は、金焼地蔵である。金焼地蔵は、「膚の守りの地蔵菩薩」の小像である。この菩薩像は、母→安寿→つし王へと手渡され、物語の最後で安寿を迎えに来たつし王が、火責めの刑にあって死んだ姉の菩提を弔うために「丹後の国に安置して、一字の御堂を建立」した。そして、「今の世に至るまで、金焼地蔵菩薩とて、人々あがめ奉る」という。しかし、『縁起』には地蔵菩薩に関する記述、つまり「さんせう太夫」の靈験譚を構成する内容は見出せず、再興前後の丹後国分寺で地蔵信仰をうかがうことはできないのである。

靈験譚とは、本来日常では有りえない常識を超えた不思議な現象を語るものである。信仰を広めようとする説経として靈験譚が語られる場合、それなりの説得性と信憑性を備え、聞き手の要求するものを含まなければ、聞き手の心を動かすことはできない(小関1976)。つまり、靈験譚においては、具体的な事実性こそ、聞き手を信用させるために必要となるのである。その点でみると、丹後国分寺の再興勧進のために創作されたものであれば、この物語は丹後国分寺

の仏像の本地譚または靈驗譚として語られるべきである。金焼地蔵も、「丹後の国」ではなく「国分寺」に安置して、「一字の御堂を建立」するべきであろう。再興にともなう丹後国内の勧進の具体的な様子は不明であるが、『縁起』の「從邑至邑、不簡貴賤勸進之、從国至国、不嫌男女乞奉加」という記述から、勧進聖が広く丹後国内を経廻しながら資金や物資を求めていた姿が想起される^{註7)}。説経師は人々の布施で生計を保っており、より効果の高い（布施を得やすい）内容を語るべく、細かい表現に至るまで工夫を凝らしていたはずである。このように、説経師の立場からみると、「さんせう太夫」は目的と内容が一致しないのである。さらに、安寿は、「身代わりにお立りある」金焼地蔵の靈驗によっても救われることはなかった。つし王の深い悲しみが姉の霊を慰めようとする行為は理解できるが、「金焼地蔵菩薩とて、人々あがめ奉る」という文句は、説経師の意図とは反しているのではないだろうか。

3点目は、民俗学における成果との齟齬である。酒向は、丹後の地において山椒太夫伝説と丹後国分寺、および金焼地蔵が結びつくのは江戸時代になってからのことと説いた（酒向1992）。全国各地の山椒太夫伝承を詳細に比較検討した酒向の業績は、現在の民俗学における研究の頂点にあると言える。松尾は、具体的な年代は記していないが、山椒太夫伝説と丹後国分寺が結びついたのは、中世末以前と考えている。口承文芸である説話の年代を明らかにするのは大きな困難がともなうが、この研究に正面から向き合わなくてはならない。

5. おわりに

本論では、「さんせう太夫」の研究で、これまで採用されていなかった考古学的な知見をもとに、論点整理をおこなった。すなわち、丹後各地に残されている国分寺伝承地のうち、和江と中山は実態がなく、丹後国分寺は創建以来府中にあったと考えた。つまり、「さんせう太夫」の舞台となった国分寺は、府中の丹後国分寺をさすとみてよい。「さんせう太夫」において国分寺が採用された理由は、松尾説が示唆に富むが課題も多いが、中世史に門外漢の筆者は、独自の見解を提示することはできない。

多くの課題が残る大きな理由は、「さんせう太夫」の実態が不明なことによる。何が物語の原形なのか、何が創作、追加された話なのかを明らかにすることはきわめて困難である。「さんせう太夫」は、北前船以前の日本海を通した海道や、岩城から会津を抜けて直江津に至る、また丹後から京へ、そして大坂へ至る陸路など、多くの文物交流の実態を秘めている。複雑に絡み合った「さんせう太夫」の成立過程を具体化できるのは、丹後国分寺跡の発掘調査成果であろう。先に、「靈驗譚においては、具体的な事実性こそ、聞き手を信用させるために必要」と記した。「さんせう太夫」において、国分寺は具体的な事実性を示す固有名詞である。発掘調査の進展で、再興に至るまでの経緯や再興後の消長にかかわる資料が増えることで、「さんせう太夫」の研究は飛躍的に進むだろう。新資料の充実を待つて後考を期したい。

注

- 1) 本稿では、森鷗外の作品は『山椒大夫』と、説経節としての作品は「さんせう太夫」と、登場人物としては山椒太夫と表記して区別する。そのテキストは、『山椒大夫』は鷗外全集（森林1973）から、「さんせう太夫」は新潮日本古典集成（室木1977）を使用した。「さんせう太夫」にはさまざまなテキストが存在する。室木は、現存する最古のテキストである説経与七郎正

本『さんせう太夫』を定本とし、欠丁部分を佐渡七太夫正本『せつきやうさんせう太夫』（明暦2年刊）と草子『さんせう太夫物語』（寛文中～末期刊）で補訂しており、最も完本に近いもの、これを採用した。なお、厨子王は『山椒大夫』での表記であるため、室木のテキストにしたがい、以下はつし王と記す。

- 2) 金焼地蔵は、つし王の危機を何度も救った身代わり地蔵であり、由良山如意寺（宮津市由良）に伝わる。如意寺の身代わり地蔵は、快慶作の木造地蔵菩薩坐像（京都府指定文化財）であり、三郎がつし王の額に押しつけた焼き金を代わって受けたとされる傷が右肩に残る。ただし、本像は高さが53.2cmあり、つし王の懐に入るような小さなものではない。また、天保12年（1841）に刊行された『丹哥府志』には、鹿原山慈恩寺金剛院（舞鶴市鹿原）の「地蔵堂の地蔵は津志王丸の身代り地蔵なりと称す。」と（小林ほか1939）、文政10年（1827）の『西国巡拝道芝之記』には、「二十八番の札所、丹後国成相寺。本堂五間四面南向、本尊聖観音なり。また当寺に安寿姫対王丸身代りに立給ふ守本尊の地蔵ぼさつ有り。」との記述がある。さらに、つし王が運ばれた朱雀権現堂（権現寺、京都市下京区）や穴太寺（亀岡市曾我部町）など、丹後をはじめ各地に身代わり地蔵伝承が残されていることがわかる。
- 3) この平瓦片は実見できていない。
- 4) 吉田は、「按に加佐郡中山の辺にも国分寺址を伝ふ、僧尼両寺両郡に分立したるにや」とし、中山の国分寺遺称地を古代の丹後国分尼寺跡と考えた（吉田1900）。また、加佐郡中山の項目では、『己巳紀行』を引用して「国分寺址、弥勒堂遺る、此は山椒太夫物語に見ゆる僧房なりとか」としたものの、「一説国分寺址は和江村と云」とも記している。また、『加佐郡誌』は、中山に関する記述はないものの、「和江の所謂国分寺は国分尼寺であらうか」（京都府教育会加佐郡分会1925）とする。木下は、これらを根拠に、与謝郡の府中にあった国府や国分寺が一時的に加佐郡に移転したと考えた（木下1976）。しかし、中山も和江も、古代の国分二寺には適さない立地であることは明らかで、これらの説も認め難い。
- 5) 奈良時代の丹後国府は与謝郡内に置かれていたと考えて問題はない。ただし、平安時代の国府所在地研究には多くの課題がある。それは、古辞書類の記述である。『和名抄』（『和名類聚抄』）と三卷本『色葉字類抄』、『延喜式』頭注は、いずれも丹後国府の所在地を加佐郡と記すものの、『拾芥抄』では加佐郡と与謝郡を併記しているのである。『和名抄』は承平年間（931～938）に成立したもので、国府所在地の記述は10世紀前半頃の状態を示すという（木下1986）。『延喜式』のうち、国府所在地が記されている金剛寺本と武田本の頭注は、大治2年（1127）の奥書を有することから、12世紀前半の状態を記したものとされる。三卷本『色葉字類抄』は、治承年間（1177～1181）までに編纂されたもので、国府所在地の記述は12世紀後半の状態を示すとみられる。一方『拾芥抄』は、鎌倉時代中期に成立していたものを南北朝時代に増補・校訂しており、国府所在地の記述は12世紀末から13世紀初め頃の状態を示すという。このように、古辞書類の記述を素直に解せば、丹後国府は10世紀前半から12世紀後半までは加佐郡に、12世紀末には加佐郡と与謝郡に併置されていたことになる。加佐郡には和江や中山の国分寺遺称地があり、「さんせう太夫」の分析にも必要な視点である。丹後国府の所在地論は本論の趣旨から外れるため別稿に譲るが、筆者は加佐郡に丹後国府が置かれたのは一時的なものだったと考えている。
- 6) 原「さんせう太夫」が、律宗西大寺派による丹後国分寺の再興勧進のために創作されたのであれば、西大寺の影響も考慮されよう。西大寺は、天平宝字8年（764）、孝謙上皇が「七尺金銅四王像」を造立したことが西大寺創建の契機である（『西大寺資財流記帳』）。このことから、

毘沙門天が国分寺の本尊として名が挙がることも可能性として想定できる。ただし、叡尊による中興後の西大寺の本尊は、建長5年（1249）、仏師善慶の作による釈迦如来立像であり、この可能性の成立は困難である。

- 7) 中世の勸進は、単に寺院造営のための金銭を集めるだけではなく、資材の調達や運搬、工事の指揮などもおこなっていた。また、勸進聖が荘園領主に勸進を申し出て、荘園領主が強制的に税として荘内の百姓に課す方法もあったという（松尾1982）。ただし、丹後国分寺など地方の中小寺院の勸進は、勸進聖が資縁を求めて廻ることが多かったと考えられる。

文 献

- 網野善彦（1984）中世「芸能」の場とその特質．演者と観客—生活の中の遊び—．小学館，東京
- 安野眞幸（1987）説経節山椒大夫の成立．列島の文化史4．日本エディタースクール出版部，東京
- 石川登志雄（1984）丹後国分寺建武再興縁起について．丹後郷土資料館報，5
- 板坂耀子校注（1991）己巳紀行．東路記・己巳紀行・西遊記（新日本古典文学大系98）．岩波書店，東京
- 岩崎武夫（1973）さんせう太夫考—中世の説経語り—．平凡社，東京
- 上原真人（2006）南山城の古代寺院．京都府埋蔵文化財論集，5
- 追塩千尋（1996）中世国分寺の再興と西大寺流．国分寺の中世的展開．吉川弘文館，東京
- 木下 良（1976）災害による国府の移転．歴史地理学紀要，18
- 木下 良（1986）古辞書類に見る国府所在郡について．国立歴史民俗博物館研究報告，10
- 京都府教育会加佐郡分会（1925）加佐郡誌．京都
- 京都府立丹後郷土資料館（1980）丹後国分寺—遺跡とその周辺．京都
- 国土交通省福知山河川国道事務所（2004）由良川風土記．京都
- 小関真理子（1976）靈験譚の方法．同志社国文学，11
- 小林玄章ほか（1939）丹哥府志．宮津町，京都
- 酒向伸行（1992）説経節系山椒太夫伝説の構造と成立．山椒太夫伝説の研究．名著出版，東京
- 吹田直子（2010）中世再興後の丹後国分寺の寺地移動について～寺蔵資料の記事を中心に～．京都府埋蔵文化財論集，6
- 谷口 謙（1977）「山椒大夫」考（私家版），京都
- 中島 正ほか（1989）史跡 高麗寺跡．山城町教育委員会，京都
- 中嶋利雄（1982）歴史時代の府中（その3）．中野遺跡第3次発掘調査概要．宮津市教育委員会，京都
- 菱田哲郎（2007）丹後地域の古代寺院．丹後地域史へのいざない．思文閣出版，京都
- 星野猷二（2000）塩澤家蔵瓦図録．伏見城研究会，京都
- 松尾剛次（1982）勸進の体制化と中世律僧—鎌倉後期から南北朝期を中心にして—．日本史研究，240
- 松尾剛次（1994）説経節「さんせう太夫」と勸進興行．列島の文化史9．日本エディタースクール出版部，東京
- 宮田 登編（1985）日本伝説大系，1．みずうみ書房，東京

- 室木弥太郎校注（1977）説経集（新潮日本古典集成8）．新潮社，東京
森林太郎（1973）山椒大夫．鷗外全集，15．岩波書店，東京
柳田国男（1915）山荘太夫考．定本柳田国男集，9．筑摩書房，東京
吉田東伍（1900）大日本地名辞書，3．富山房，東京
吉田美昌（1972）第1次加佐地区遺跡分布調査についての概報．舞鶴市史編さんだより，3．舞鶴市史編さん室，京都
和江区（1972）和江の歴史（私家版），京都

要 旨

近世初頭に成立した説経節「さんせう太夫」では、丹後国分寺が重要な舞台の一つとなっている。本論では、「さんせう太夫」の研究で、これまで採用されていなかった考古学的な知見をもとに、論点整理をおこなった。丹後には国分寺遺称地が3か所あるものの、考古学的な調査成果などから、奈良時代の創建から府中に置かれていたことが明らかとなった。つまり、「さんせう太夫」の舞台となった国分寺は、府中の丹後国分寺をさすとみてよい。物語に和江の国分寺が採用された背景には、鎌倉時代における丹後国分寺の再興にともなう勧進が関係している可能性が高いものの、問題点も多い。発掘調査の進展など丹後国分寺に関する新資料が増えれば、「さんせう太夫」の成立過程なども明らかにし得るだろう。

キーワード：丹後、「さんせう太夫」、国分寺